令和六年度入学者選抜学力検査追試験問題

国　語

（配　点）

1	2	3
35点	37点	28点

（注意事項）

1　問題冊子は指示があるまで開かないこと。

2　問題冊子は一ページから二十ページまである。検査開始の合図のあとで確かめること。

3　検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。

4　解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。

5　解答には、必ず**ＨＢの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりにマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。

6　一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。

7　解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本文化においては二種類の二次的自然が存在する。一つは奈良と京都で貴族が発展させたもので、もう一つは平安時代中期から後期にかけて地方の荘園に現れた「里山の風景」である。この二種類の二次的自然の表現は平安時代から鎌倉時代にかけて出会い、室町時代には多くの文化的ジャンルで重なり合う。

古くから日本人は稲作のために原野を開コンした。古代に始まり平安時代から中世にかけて拡大した荘園制度にとって、新田の開発は最重要事項の一つであった。未開地を田に変えていく過程で、より多くの耕作可能な土地を作り出すために、人々は躊躇することなく大木を伐採して森を切り開き、動物を殺した。古代においては、野生の自然は「荒ぶる神（邪悪で人間に害をなす神）」の領域とみなされていた。『肥前国風土記』の「佐嘉郡」のくだりには佐嘉川の荒ぶる神の描写がみられる。

一ひと云へらく、郡の西に川有り。名を佐嘉川と曰ふ。年魚あり。其の源は郡の北の山より出で、南に流れて海に入る。此の川上に荒ぶる神有りて、往来の人、半ばを生かし、半ばを殺しき。

佐嘉郡の西にある佐嘉川は、郡の北の山が源流であり、そこから南へ流れて海へ注ぐ。川では鮎がとれるが、川上には荒ぶる神がいて、往来の人の半数を殺してしまう、という描写である。同様の例として、『古事記』や『日本書紀』（以下、記紀）に登場するヤマタノオロチが挙げられる。ヤマタノオロチは米を全滅させ、毎年、生贄として村の若い娘を要求したが、スサノオノミコトが退治する。ヤマタノオロチは稲作にとって川の氾ランや洪水の危険性を、スサノオノミコトは荒れ狂う川を治める力を表している。記紀や風土記が示すように、古代においては自然の荒ぶる神と人間の世界との間には明確な境界が存在し、人間は周囲の山の麓に社を建てて人間に危害を加える神を敬い、鎮めようとした。

しかし、平安中期から後期にかけ、荘園において自然に対する人間の態度に大きな変化が起こる。飯沼賢司が考古学的発掘調査を通して示しているように、土地を農作に用いることをボウ害していた荒ぶる神が、稲作の神に姿を変える。神々は稲作に欠かせない水、堰、灌漑の神、そして土地を守る鎮守の神となり、「田遊び」のような儀式や豊作祈願をとおして崇められた。神を祀る社はかつては荘園のはずれにあったが、荘園の中に建立されるようになる。これは（人間の側から見て）自然とのさらなる協力関係を象徴している。この変化は、人間が自然を特に治水と灌漑の面でより技術的に管理できるようになったことの反映でもあった。

このように自然の神々を崇めて鎮め、人間が手を加えて作った擬似自然のような自然環境が、現代にまで続く日本の生態系であり、生態学者が「里山」と呼ぶものの始まりである。村人は川の近くに住み、川は水田の灌漑に用いられた。村人は水田から収穫を得るのに加え、周りの草地や雑木林から田の肥料や牛や馬の飼料、建築資材、薪などを手に入れることができた。中世の説話や民話の登場人物はよく「山に芝刈り」に行く。これは薪を

拾ったり、肥料として下生えや落葉を集めたりするために藪や森に出かけることを意味する決まり文句である。つまり、E里山の自然は水田と周囲の山から常に収穫が得られ、循環処理と再利用が行われる二次的自然の一つであった。それは鳥や虫に焦点をあて、色や香りを志向する、都で見られるような(4)優雅で小ぶりの二次的自然とは根本的に異なっていた。

中世初期の説話集(注6)『宇治拾遺物語』（十三世紀初め）巻一に収められている「田舎ノ児桜ノ散ヲ見テ泣ク事」（第十三話）では、自然に対する里山の態度と貴族社会の態度との違いが強調されている。

これも今は昔、田舎の児の比叡の山へ登りたりけるが、桜のめでたく咲きたりけるに、風のはげしく吹きけるを見て、この児さめざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、「などかうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを惜しう覚えさせ給ふか。桜ははかなきものにて、かく程なくうつろひ候ふなり。されどもさのみぞ候ふ」と慰めければ、「桜の散らんはあながちにいかがせん、苦しからず。我が父の作りたる麦の花の散りて、実の入らざらん思ふが侘しき」といひて、さくりあげて、よよと泣きければ、うたてしやな。

（これも今は昔、田舎の稚児が比叡山で修行していたが、桜が見事に咲いているところに風が激しく吹くのを見て、声を忍ばせて泣いていた。それを見た僧がそっと近寄り、「なぜそのように泣くのですか。この花が散るのをC名残惜しく思っておられるのか。桜ははかないもので、こうしてすぐに散っていくものです。しかしそれはそういうものなのです」と慰めると、稚児は「桜が散るのはどうしようもないことですから、かまいません。私の父の作った麦の花が散って、実が入らなかったらと思うと悲しいのです」と言って、しゃくりあげて泣いたという。(5)情けないことだよ。）

物語は、桜の花を愛で、散るのを惜しむという和歌にもとづく貴族的な僧の自然観と、和歌や宮廷物語にはまず登場しないが農作には欠かせない麦の生育を案じる農家の子である稚児の自然観をユーモラスに対比している。

自然に対するこの二種類の基本姿勢は、平安時代の物語や日記のような和歌を基盤とするジャンルと、記紀、風土記、説話、軍記物といったジャンルとの違いにも見てとれる。『日本霊異記』（八二二年頃）や『今昔物語集』（十二世紀初め）といった説話集は、多彩な動物――犬、狼、狸、狐、猫、虎、熊、馬、牛、鹿、猪、羊、ムササビ、鼠、兎、象、猿――を描いている。それらの多くは里山に生ソク④し、食料として捕獲され、農作業で用いられることもあった。

一方、(注7)勅撰和歌集や物語では、動物の世界は猫のような数種類の愛玩動物や鹿、囀る鳥、鳴く虫にほぼ限定されている。「伏す猪の床」として猪が歌に詠まれるなどの例外的事例はあるものの、和歌における自然は優雅な世界であり、野生動物や家畜は重要な役割を果たしていない。そのため、自然界と人間界との間に親密な調和が生まれた。和歌に登場する鳥、虫、鹿といった動物は、松虫（「待つ虫」）のような掛詞的な連想か、その鳴く音が尊重された。「なく」という動詞が「鳴く」と「泣く」の意味を持つように、これらの動物は人間の内なる感情を表現するものとなる。

いうまでもないことだが、平安時代と中世の農民たちに詩歌、絵、庭などを楽しむといった贅沢は許されなかったし、茶道やいけ花のような文化的活動に関わることもなかった。和歌や宮廷文学に登場する美化された「山里」と、農村の現実の生活の間には大きな落差がある。田舎の農民は自然の猛威や、自然のもたらす災禍、洪水、旱魃(注8)、疫病、飢饉などと絶えず戦っていた。和歌の優雅な世界にみられる虫や鳥とは異なり、稲穂を食い荒らす多くの虫や鳥は厄介者であり、農民はそうした動物や虫を殺さなくてはならなかった。そのため、虫を含め、殺された動物たちを供養する現象が広くみられる。

民俗学者が示しているように、日本には昔から虫送りの伝統がある。村人が松明を灯し、鉦や太鼓を打ち鳴らして害虫を村の外へ追い出す儀式だが、その後、虫供養を行い、農作業で殺した虫を供養する。同じような供養は鯨、魚、猪、鹿、その他の狩猟で捕えられる動物たちに対しても行われた。多くの中世説話、お伽草子(注9)、能(注10)が、自然を管理する必要――特に狩猟を行い、害をなす動物や虫を殺し、森林の伐採を余儀なくされること(注11)――と、神々が住む世界とされた自然を慰撫(注12)し、敬意を表したいという願いとの間の根本的対立を描き出している。これは仏教が浸透し、殺生(注13)を禁じたことによってさらに複雑になっていった。

（ハルオ・シラネ『四季の創造　日本文化と自然観の系譜』角川書店　による）

（注1）躊躇＝あれこれ迷って決心できないこと。
（注2）肥前国風土記＝肥前国は旧国名の一つ。風土記は地方別に風土・産物・文化などを記した奈良時代の書物。
（注3）『古事記』や『日本書紀』＝いずれも奈良時代の歴史書。
（注4）堰＝土を積んで水の流れをせきとめるもの。
（注5）灌漑＝水路をつくって田畑をうるおすこと。
（注6）説話集＝語り伝えられた短い話をまとめたもの。
（注7）勅撰和歌集＝天皇または上皇の命令により作られた公的な和歌集。
（注8）旱魃＝長期間雨が降らず、田畑が乾燥すること。
（注9）お伽草子＝室町時代から江戸初期にかけて作られた短編物語。
（注10）能＝室町時代につくられた歌舞劇。
（注11）余儀なく＝他に取るべき方法がない。
（注12）慰撫＝なぐさめ、いたわること。
（注13）殺生＝生き物を殺すこと。

問1　本文中の、①開コン、②氾ラン、③ボウ害、④生ソク　のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

①開コン　ア 根　イ 墾　ウ 混　エ 献
②氾ラン　ア 乱　イ 欄　ウ 濫　エ 覧
③ボウ害　ア 防　イ 坊　ウ 傍　エ 妨
④生ソク　ア 促　イ 即　ウ 息　エ 側

問2　本文中の、なっ[a]、加え[b]、名残惜しく[c]、絶え[d]　の中で、**他と活用形が異なるもの**を一つ選べ。

a　なった　　**b**　加えて　　**c**　名残惜しく思って　　**d**　絶えず

問3　本文中に、(1)二次的自然　とあるが、「二次的自然」に**当てはまらないもの**を、本文中の破線部**A**から**E**までの中から一つ選べ。

A　荘園　　**B**　新田　　**C**　野生の自然　　**D**　擬似自然のような自然環境　　**E**　里山の自然

問4　本文中に、(2)川上には荒ぶる神がいて、往来の人の半数を殺してしまう、とあるが、この描写について説明したものとして最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　生活用水である川を汚染から守るため、地元の人たちが、荒ぶる神という恐ろしい存在を示すことでよそ者が近づかないよう威嚇している。

イ　川で起きる自然災害を上流にいる神のしわざと考え、荒ぶる神が人に害悪を及ぼすという話によって、自然災害の恐ろしさを表現している。

ウ　荒ぶる神のいる川の上流に知らずに立ち入ってその怒りに触れてしまった人々の話を、信仰心のあつい人たちが、戒めとして伝承している。

エ　川の上流では、熊などの獣により被害に遭う危険性が高まることから、川上には荒ぶる神がいるとして近付くべきではないと警告している。

問5　本文中に、(3)神を祀る社はかつては荘園のはずれにあったが、荘園の中に建立されるようになる。とあるが、なぜこのようなことが起こったのか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　治水や灌漑技術の発達により、人間に危害を加えるものとしてではなく豊作をもたらすものとして自然を捉えるようになったから。

イ　豊作の神を荘園内に迎え入れ強固な協力関係を築くことで、人間に危害を加える荒ぶる神から農地を守ってもらおうと考えたから。

ウ　技術の進歩によって自然を管理できるようになり、人間が自らの手で豊作を維持できるようになったことを誇示しようとしたから。

エ　堰の設置や灌漑により豊作が増えたことで、自然はもはや警戒し敵対すべき対象ではなく人間の管理下にあると示そうとしたから。

問6　本文中に、(4)優雅で小ぶりの二次的自然　とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　洪水などの災害を含む現実的な自然ではなく、特定の生き物の声や自然の色、香りなど、貴族の想像の中にしか存在しない理想的な自然。

イ　人の手が加えられていない天然の自然ではなく、特定の生き物の声や自然の色、香りなど、都の人々の生活のために作られた人工的な自然。

ウ　鳥、鹿、猪といった、生活に利用される自然ではなく、特定の生き物の声や自然の色、香りなど、都の周辺だけに存在する手つかずの自然。

エ　収穫や再利用などによって生活に役立てられる自然ではなく、特定の生き物の声や自然の色、香りなど、美的な対象として扱われる自然。

問7　本文中の、(5)情けないことだよ。は、『宇治拾遺物語』の語り手が、僧と稚児のやり取りに対して自分の思いを述べたものである。ここには語り手のどういう思いが表れているか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　桜の散るのを名残惜しく思うのも、麦の花が散って実が入らないことを案じるのも、すべては移ろいゆく定めだからどうすることもできないと、世の中の無常をはかなく思っている。

イ　風に散る桜を惜しんでではなく、風が実家の麦の花を散らし収穫が減ってしまうことを案じて泣いていたとは、何とも風雅の心とはかけ離れていることよと、稚児の返答にあきれている。

ウ　稚児の故郷がどうなっているかと心配して声をかけてくれた僧の思いやりに気づくことなく、自分の悲しみにひたっているばかりの稚児の様子を、まだまだ未熟であると考えている。

エ　故郷のことを思って涙を流す心優しい稚児を、泣き止ませるどころかますます泣かせてしまうとは、何とも余計な発言をしてしまったものだと、僧の対応のまずさを苦々しく思っている。

問8　この文章の内容に当てはまるものを、次の**ア**から**オ**までの中から一つ選べ。

ア　農村の現実生活のなかで作り出された二次的自然と、都の人々の繊細な心情によって育まれた二次的自然は、時代の流れとともにその違いが薄れていき、両者は徐々に同化し区別がなくなっていった。

イ　宮廷文学に登場する美化された「山里」と農村の現実の生活との間の大きな落差を解消するために、自然に対する里山の態度と貴族社会の態度との違いが、説話の中で繰り返し描かれるようになった。

ウ　和歌において鳥、虫、鹿などの動物の鳴く音に人間の感情を託して表現していたように、日本文学に登場する動物たち、なかでも野生動物は自然界と人間界との親密な調和を象徴するものである。

エ　生きていくために狩猟や害虫駆除や森林伐採などの形で自然を管理し、必要があれば生き物を殺すことがある一方で、自然を崇め、なぐさめようとするところに、日本文化の持つ複雑な側面がある。

オ　農民は稲穂を食い荒らす多くの虫や鳥を厄介者として殺さなくてはならなかったが、虫や鳥を優美なものとする貴族社会の考え方から次第に影響を受け、殺された動物たちを供養するようになった。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

テクノロジーが未来世代にどのような脅威をもたらすのか、ということは、テクノロジーが社会にどのような影響を与えるのか、という観点から考える必要がある。ただし、テクノロジーと社会の関係はそう単純ではない。確かにテクノロジーが社会に影響を与えることはあるが、しかし、テクノロジーもまた社会の構造によって影響を受けるからだ。

では、テクノロジーと社会はどのような関係にあるのだろうか。以下では、こうした関係を説明する理論として、技術決定論、社会決定論、社会構成主義という三つの考えを紹介する。

技術決定論とは、文字通り、技術が社会を決定する、という考え方である。新しいテクノロジーが作り出され、それが社会に普及していくと、それまでの社会のあり方はテクノロジーによって変容する。①、私たちの社会のあり方は、その社会がどのような技術によって支えられているかによって、条件づけられているということだ。

例えば鉄道という技術について考えてみよう。鉄道は、それまで人類の社会で支配的だったさまざまな交通手段と比較して、はるかに高速に、はるかに広域に、はるかに大量に、人や物を輸送することができた。だからこそ鉄道は世界中に拡散し、さまざまな社会の中に同一の技術的な手段をもたらすことになった。

鉄道の普及は、社会のあり方を大きく変えることになった。鉄道が町から町への移動手段として一般化し、それによって物流や通勤が支えられるようになると、人々は鉄道の時刻表に合わせて行動することを余儀なくされた。それは人々の時間感覚を変え、生活のリズムを刷新(a)していったのだ。

鉄道が普及する前、人々は日が昇ってから活動を始め、暗くなったら家に帰っていた。しかし、鉄道が普及し、それが社会の細部にまで浸透していくと、人々は鉄道の時刻表に合わせて生活することを余儀なくされていった。何時何分に起きて、何時何分には家を出て、何時何分の鉄道に乗るという、分刻みのスケジュールを立てなければならなくなった。

そのように時間感覚が更新されるのにつれて、「遅刻」が社会における許されない悪徳として浸透するようになった。やや乱暴な言い方をするなら、「遅刻」(1)は鉄道というテクノロジーによってもたらされた規範的な概念なのだ。このようにして、鉄道は交通手段を変えるだけではなく、社会の価値観をも変えてしまったのである。

技術が社会を決定すると考える技術決定論に対して、反対に、社会が技術を決定するという立場もあり得る。それが社会決定論と呼ばれる考え方だ。

もし、技術決定論が想定するように、技術が社会を決定するのなら、ある技術はそれが用いられる社会を一様にするはずである。例えば、鉄道が普

及する社会は、どの国であっても同じような姿をしていることになる。もちろん実際にそうした事例はあり得るだろう。[②]、全ての技術がそのような形で普及するわけではない。

(2) 社会決定論を正当化する典型的な例として挙げられるのは、鉄砲である。鉄砲が日本に伝来したのは一六世紀のことである。当時、戦国時代であった日本社会で、鉄砲はすぐに多くの武将の目に留まり、合戦に投入された。武田勝頼（たけだかつより）を破った織田信長（おだのぶなが）は、当時のヨーロッパ社会で使用されていたよりも、はるかに大量の鉄砲を製造し、戦場に投入したという。日本においてこそ鉄砲は紛れもなく戦争の主戦力になった。

しかし、江戸幕府が開かれると、今度は一転して鉄砲は全く使われなくなっていった。鉄砲の用途は狩猟などに限定され、鉄砲の製造権は幕府によって独占された。それによって、日本において鉄砲は進歩しなくなり、幕末において西洋の火器と比べて大きく後れを取ることになる。

このように、鉄砲という同じ技術であっても、それがどんな国で、どんな社会で使われるかによって、使われ方が全く異なるのである。それは言い換えるなら、日本の社会が鉄砲という技術によって決定されたのではなく、反対に、鉄砲という技術のあり方が日本の社会によって決定されているということだ。このような事例は、社会が技術を決定する、という社会決定論の立場からしか、十分に説明することのできないものである。

技術決定論と社会決定論は真っ向から対立する。それではどちらが正しいのだろうか。結論から言えば、それはどのような技術について考えるかによって、変わってくる。技術決定論が適切であるような事例もあれば、社会決定論が適切であるような事例もあるだろう。しかし、技術と社会の関係を捉えようとする見方は、これだけに尽きない。

技術決定論と社会決定論は、ある意味では、技術と社会の関係を一面的に捉えるものである。[③]両者はともに、技術と社会を切り離して考えることができる、ということを前提にしているからだ。技術決定論は、技術が社会を決定すると考えている以上、技術そのものは社会から影響されないという前提に立っている。また社会決定論は、反対に、社会そのものは技術から影響されないという前提に立っている。しかし、これは本当だろうか。

このような見方に異を唱え、むしろ技術と社会の関係を密接に相互連関するものとして説明するのが、社会構成主義と呼ばれる立場である。

社会構成主義について論じられる際、しばしば例に挙げられるのが、アメリカのロングアイランドの橋である。ロングアイランドはニューヨークの保養地として知られており、その地を訪れるためには橋を通らなければならない。しかし、その橋の車の高さ制限は非常に低く設計されており、大型のバスはその橋を通過できないようになっている。

なぜ、設計者はわざわざそうした制約のある橋を設計したのだろうか。(注1) ラングトン・ウィーナーによれば、それは大型バスの通過をさまたげることで、自家用車を所有できない低所得者層、具体的には黒人たちをロングアイランドから排除するためだという。つまり、アメリカ社会に根づく黒人差

別が、ロングアイランドの橋という技術的な構造を規定しているということだ。

この事例を技術決定論や社会決定論で説明できるだろうか。ロングアイランドの橋は、黒人差別という社会的な要因によって設計されているのだから、[A]が[B]を決定しているとは言えない。しかし、そうした黒人差別は、橋によって強化され、再生産されているのだから、そうした[C]的な要因が[D]的な要因から自由であるとも言えない。つまり、社会が技術を決定しているとも言えない。むしろ、両者は相互に連関し合い、互いを条件づけることによって、初めてロングアイランドの橋が成立しているのである。

このように、社会構成主義の立場に従うと、技術と社会の相補完関係を説明できるようになる。例えばロングアイランドの橋の例には、黒人差別という不正義が反映されているが、しかし、誰かが黒人に対する憎悪を言葉で表現しているわけではない。「黒人はロングアイランドに来るな！」と叫ばれているわけではない。ただ、黒人がロングアイランドに来ることができないよう、技術的な設計が行われているのである。そしてそうした設計は、ヘイトスピーチによって黒人を差別するよりも、はるかに効率的に、黒人差別を実現してしまう。その橋を利用して白人がロングアイランドにやってくるとき、白人たちは自分が黒人差別に加担していることに気づかない。そして、(3)それに気づかせないことによって、黒人差別はより根深く、解消することが困難なものになっていくのである。(注2)

表１　課題の定義の仕方

	趣旨	課題の発見	ゲノム編集の課題の例
技術決定論	技術が社会を決定する	（　a　）ことで生じる課題は何か	ゲノム編集された子どもへの差別
社会決定論	社会が技術を決定する	（　b　）ことで生じる課題は何か	軍事利用
社会構成主義	技術と社会は補完し合う	（　c　）ことで生じる課題は何か	オーダーメイドベイビービジネス

未来倫理が取り組むべき課題は、テクノロジーによる社会への影響に基づいて、発見されなければならない。したがって、どのように課題を発見するか、ということは、技術と社会の関係がどのように捉えられているのかによって、大きく変わる。以下では、これまで取り上げてきた技術決定論、社会決定論、社会構成主義の三つの立場から見えてくる、課題の発見の仕方を考えてみよう。

まず技術決定論の立場に従うなら、課題は、技術が社会をどのように変えてしまうのか、という点から説明される。つまり、ある新しい技術が、その技術のせいで、社会を望ましくない形で変化させてしまうことが、課題として理解されなければならない。例えばゲノム編集(注3)を例に挙げるなら、ゲノム編集された子どもへの差別が挙げられるだろう。そうした差別は、ゲノム編集という技術が登場しなければ、社会には存在しなかったものであり、この技術によって社会が変化したことで生じる課題なのである。

これに対して、社会決定論に従って考えるなら、課題は、社会が技術をどのように用いるのかという点から説明される。つまり、ある新しい技術が、それが用いられる社会の中で、望ましくない使われ方をされてしまうことが、課題と

して捉えられることになる。同じくゲノム編集を事例とするなら、例えば、軍事利用がそうした課題として挙げられる。人権意識の低い国家が、強靭(じん)な肉体を持つ兵士や、死に対する恐怖心を持たない兵士を作るために、組織的にゲノム編集を行うかもしれない。こうした問題は、ゲノム編集が普及すればどの社会でも起こり得るものではなく、特定の国家で、特定の権力が悪用することによって、初めて立ち現れてくるものだ。

最後に、社会構成主義の見地から考えるなら、課題は、技術と社会の相補完関係から説明されることになる。すなわち、(4)ある新しい技術が、それが用いられる社会の中で最適化することで、その社会の望ましくない規範を強化してしまうという事態が、課題として説明される。例えば、ルッキズム（ルックスによる差別）が根ざしている社会において、ゲノム編集がオーダーメイドベイビービジネスとして産業化され、普及していくと、髪の毛や瞳の色に特化したゲノム編集技術が確立されると同時に、もともとそうした技術を要求していたところのルッキズムは強化され、再生産されるだろう。

このように、一つのテクノロジーについて考えるのだとしても、技術と社会の関係をどのように捉えるのかによって、発見され得る課題は異なってくる。私たちが、未来世代への脅威となる課題を(b)網羅的に把握しようとする限り、こうしたさまざまな観点から考えることが必要不可欠になるだろう。

（戸谷洋志(とやひろし)『未来倫理』集英社　による）

（注1）ラングトン・ウィーナー＝アメリカの政治学者。　（注2）未来倫理＝未来世代のためにわれわれが何をすべきか、という問題。
（注3）ゲノム＝細胞内のＤＮＡ（遺伝子）とそこに書き込まれた遺伝情報全体。ゲノム編集はＤＮＡを切断して遺伝子を書き換える技術。

問1　空欄 ① 、 ② 、 ③ に入る語として適当なものを、それぞれ次の**ア**から**エ**までの中から選べ。**ただし、同じ記号は二回使わない。**

ア　しかし　**イ**　むしろ　**ウ**　なぜなら　**エ**　つまり

問2　本文中の、(a)刷新、(b)網羅　の意味として適当なものを、それぞれ次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

(a)　**ア**　全く新しくすること　**イ**　一部変更すること　**ウ**　不規則にすること　**エ**　規律正しくすること

(b)　**ア**　該当するものだけを選んで検討すること　**イ**　関係するものを残らず集めつくすこと
ウ　基礎的な情報を科学的に検証すること　**エ**　全ての意見を分析してまとめ上げること

問3　本文中に、(1)「遅刻」は鉄道というテクノロジーによってもたらされた規範的な概念なのだ。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　時間通りに運行し、決して遅れることがない鉄道の存在が人間の一日の生活のリズムを変化させ、労働の開始時刻に遅れることは許されない行為であるという認識が社会に広まった。

イ　予定の時間に従って鉄道が運行され、それに間に合うように人々が行動するようになった結果、生活全般においても予定に遅れないよう行動すべきだという認識が社会に広まった。

ウ　毎日のように鉄道を利用して移動するという習慣によって、人々が一日の時間配分を意識するようになり、制限時間を必ず守るよう心掛けることが当然のことになっていった。

エ　鉄道が普及し、社会に浸透していった結果、日の出と日没に合わせた生活リズムは古い習慣であるとの認識が生じて、予定を先取りして行動することが当然の行為になった。

問4　本文中に、(2)社会決定論を正当化する典型的な例として挙げられるのは、鉄砲である。とあるが、どういうことか。それについて述べた次の説明文の［　　］に当てはまるものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

〈説明文〉［　　］**は、社会が技術のあり方を変えていった例と言える。**

ア　戦国時代の日本社会で、鉄砲が多くの武将の目に留まり、すぐに多くの合戦に投入されたことで戦乱の規模が拡大していったこと

イ　織田信長が当時の常識を超えて、それ以前の時代に比べてはるかに多くの鉄砲を戦場に投入し、武田勝頼を完全に打ち破ったこと

ウ　戦国時代の日本が鉄砲を多用したおかげで、当時の日本がヨーロッパ社会よりもはるかに大量の鉄砲を生産するようになったこと

エ　江戸幕府が鉄砲の製造を独占して、鉄砲の用途が限定的なものになったことで、日本では鉄砲自体の性能が進歩しなくなったこと

問5　本文中の［A］、［B］、［C］、［D］には「技術」「社会」のいずれかの語が入る。正しく当てはまる組み合わせを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　A＝社会　B＝技術　C＝社会　D＝技術

イ　A＝技術　B＝社会　C＝技術　D＝社会

ウ　A＝技術　B＝社会　C＝社会　D＝技術

エ　A＝社会　B＝技術　C＝技術　D＝社会

問6 本文中に、(3)それに気づかせないことによって、黒人差別はより根深く、解消することが困難なものになっていくのである。とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア 橋を利用する人々に差別を行っている意識はないが、実際には多くの人々が様々な場面で差別的な言動をしているため、差別を全てなくすには膨大な時間がかかるから。

イ 橋を利用することによって差別が再生産されていくが、多くの人々が長い時間をかけて合意しそれを維持すべきだと考えているため、現状を変更することが難しいから。

ウ 橋を利用する人々は差別しているという自覚がないまま、無意識に差別の再生産に加担しているため、その状態を当たり前だと思って差別の存在自体に気づけないから。

エ 橋の利用によって差別を行う側が得られる利便性は大きく、橋を通らないことにほとんどメリットはないため、全ての利用者に橋を通らせないことが非常に困難だから。

問7 本文中に、(4)ある新しい技術が、それが用いられる社会の中で最適化する とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア ある技術が開発された後で、それを用いる社会が新技術に伴う新たなニーズに適した制度を整備していく。

イ ある社会で新技術を導入した後に、それを用いた製品の特徴が人々に知れ渡り購入する層が絞られていく。

ウ ある社会で必要とされる事柄に応じる形で、新技術がその社会で用いられるのに適した形に変わっていく。

エ ある技術のあり方が、それを用いる社会との相互関係の中で次第に変質して予想しない効果を生んでいく。

問8 **表1**の（ a ）、（ b ）、（ c ）に当てはまる表現を、それぞれ次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。**ただし同じ記号は二回使わない。**

ア その技術が社会の望ましくない規範を強化する

イ その技術によって多くの社会が一様になる

ウ その技術が社会によって望ましくない使われ方をされる

エ その技術によって社会が変化する

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

小学六年生の町田良子（まちだりょうこ）は幼いころからバレエダンサーになりたいと思い、一心にレッスンに励んできた。常に冷静で頭もよく、クラスの中でも一目置かれている。二週間前、ドイツのバレエスクールとの合同公演のオーディションを受けることを打診された良子は、喜びながらも、日程が修学旅行と重なっていることに気づき、悩んでいた。

「まっちーださん！」

下駄箱で靴のヒモを結び直していると、目の前に、ばこんと水色のスニーカーが落ちてきた。

この声、このガサツさ。

「ちょっと、ほこりが立つでしょ。」

顔をあげると人懐こい丸顔の細川（ほそかわ）さんが立っていた。一瞬、ホッとした自分に気づいて、わざと「なに？」と険(a)のあるいいかたをした。

「修学旅行に行かないってホント？」

……やっぱり細川さんだ。もう少しオブラートに包んでいえないんだろうか。

「細川さんには関係ないでしょ。」

「えー、あるある、大あり。」

まさかクラスメイトだから、とかいったりしないでしょうね。いや、この子ならそういうことを平気な顔でいったりしかねない。

「どうして。」

「だって(1)猛獣がいて猛獣使いがいなかったら大変じゃん。」

意味がわからない。いっていることが想像の斜め上をいきすぎていて、返事に困る。

わたしが目を細めると、「それそれ！」とばか笑いをする。

「あのさ、町田さんはどう思ってるか知らないけど、坂巻（さかまき）さんとか加賀（かが）さんって、町田さんがいるからうまいこといってるけど、あの人たちだけにしたら、絶対めんどうなことになるから。」

「はっ？」

「町田さんがいないってことで、まず坂巻さんなんかがうじうじして陰気な空気出すでしょ。で、周りが楽しそうにしてるのを見て辛気臭(b)くなって、八つ当たり的に文句と悪口が倍増。せっかくの修学旅行なのに、それは回避したいじゃん。」

細川さん……。いま、かなり辛辣なことをぺろっといったけど。
「それにさ。」
今度は声をひそめた。
「揚げ湯葉まんじゅう、食べたいでしょ。」
「アゲユバ。」
「日光っていったら揚げ湯葉まんじゅうだよね。まえから食べてみたかったんだ。」
揚げてある湯葉まんじゅうってこと？　っていうより、せっかくヘルシーな湯葉を、おまんじゅうにして、さらに油で揚げるってどうなんだろう。
「日光っていったら、水ようかんとか蕎麦（そば）じゃないの。湯葉も有名だけど。」
思わず返すと、細川さんはうんうんと幸せそうにうなずいた。
「水ようかんもいいよねー。おばあちゃんのお土産は絶対水ようかんって決めてるんだ。」
「……あっそう。」
そんなことわたしには関係ないことだけど。
「だから町田さんには来てもらわないと困るってこと。」
そのだからは、どこにつながるのかまったくわからない。
「いとちゃーん！」
廊下の向こうから、日野（ひの）さんと高峯（たかみね）さんが駆けてきた。細川さんは「おーい。」と両手をあげてふたりに手をふった。
「よけいなお世話。」
わたしがそういって校門のほうに足を向けると、背中から「トランプもって行くからー。」と細川さんの声が大きく響いた。
葡萄（ぶどう）色のレオタードとタイツ、それからオーディションのエントリーシートをレッスンバッグに入れた。迷ったけど、ぎりぎりのところでわたしはオーディションを選んだ。どちらかに決めてさえしまえば、もう気持ちはゆれない。捨てたことを未練たらしくいつまでも考えるようなムダなことはしたくないし、わたしはそういう人間じゃない。そう思っていた。
なのになぜだろう。胸の奥が落ち着かない。

バッグに入れたエントリーシートを取り出して、もう一度机の上に置いた。

わたしの夢はプロのバレエダンサーになることだ。ただの憧れなんかじゃない。

まえの教室では、家族で出かけるからとか、友だちの誕生日パーティーがあるからと、レッスンを休む子もいた。でもわたしは一度も、そんな理由で休んだことはない。足をケガしたときも、教室へ通った。レオタードを着て鏡に自分を映す。からだのライン、姿勢をチェックして、上半身や指の動きを確認する。レッスンはできなくても、できることもすべきこともいくらでもある。

食べることや着るものも同じことだ。バレエを中心に考えれば、自分がすべきことはかんたんに答えが出る。

バレエはわたしを強くしてくれる。わたしをわたしらしく生きさせてくれる。わたしにとって、信じられるただ一つのものだった。ずっとずっと。

いつからだろう。友だちの存在がわたしのなかでほんの少しふくらんで、ママになにかを期待して、やってみたいことがぽつぽつと目の前にちらついて。

(2) 大切なものが増えたぶん、わたしは弱くなった。

ふっと息をついて、バッグのなかのエントリーシートを確認し、ゴムで髪を結わき直して部屋を出た。

「良子ちゃん、ちょっといい？」

レッスンが終わったあと、麻里子先生に呼び止められた。

「オーディションの申し込みなら」

「うん、周子先生からさっき預かったよ。」

はい、とうなずくと、麻里子先生は「座らない？」と、スタジオの隅に腰をおろした。片膝を立てて、もう片方の足は足先を反対側の足の腿裏につける。背筋はピンと伸びたままだ。

麻里子先生は座り姿もきれい。わたしは両膝を立ててその足に両手をまわした。

つぎの時間は大人のレッスンで、もう数人がスタジオのなかを走ったり、エアー縄跳びをしてウォーミングアップをはじめている。そうしてからだを温めてから、ストレッチをするのがレッスンまえの流れだ。

「修学旅行、行かなくていいの？」

「えっ？」

わたしが小さく声を漏らすと、麻里子先生は目じりをさげた。
「重なってるんだって？　修学旅行。」
まあ、とことばを濁らせた。
「でもめずらしいね、良子ちゃんが迷うって。あぁ、誤解しないでね、わたしは迷って当然だと思うよ。そういうことじゃなくて。うん、良子ちゃんがどっちを選ぶか、悩めるようになったことって、わたしはすてきなことだと思ってるの。」
「すてき、ですか。」
うん、すてき。と麻里子先生は顔をくしゃっとさせた。
「迷ったり悩んだりできるって、それだけ良子ちゃんにとって大切なものがあるってことだからね。」
(3)「でも。」
ん？　と首をかしげる麻里子先生に、いいえとかぶりをふった。
でも、大切なものをすべて手に入れるなんて都合のいいことは、できっこない。あれもこれもと手を伸ばしたら、きっと一番大切なものを失う。だから、一番大切なものを手放したくなかったら、欲張ってはいけない。
あれもこれも手に入れることができるのは、本当の天才と、一番をもっていない器用な人だけ。
わたしは凡人だから。一番があるから。だからほかのことは望んじゃいけない。
……わかっていたはずなのに、どうしてあんなに迷ったんだろう。
「野球ばか。」
へっ？　と顔をあげた。
「野球ばかとかサッカーばかっていうじゃない？　あれってどんな意味か知ってるよね。」
「野球とか、サッカーに熱中しているとか、打ちこんでいる人のことですよね。」
麻里子先生は、そうそうとうなずいて、もう一つ、と人さし指を立てた。
「それしか知らない、その世界しか知らないっていう意味で使われる場合もあるの。ばかっていうのはいい過ぎだと思うけど、ある意味あたってるよね。たとえばさ、子どもがすごく野球うまかったとするでしょ。そうすると、親も周りも期待するじゃない。末はプロ野球選手か大リーガーかなんてね。」
と、目じりをさげた。

「そうなると勉強ができなくても、自己中心的で周りが引いていても、この子には野球があるから、特別なものがあるから、って放置しちゃう。野球だけやっていればいいんだ、みたいにね。」

麻里子先生は、(4)すっと真顔にもどった。

「良子ちゃんには、そうなってもらいたくないな。べつに、(注1)ストイックに一つのこと極めていくことを否定しているわけじゃないのよ。そういうことが必要な時期もあると思う。けど、良子ちゃんは小学生だよ。いまから捨てるクセをつけちゃダメ。」

そういって麻里子先生は、ムダのない動きで立ちあがった。

「……修学旅行に行ったほうがいいっていうことですか?」

わたしがいうと、麻里子先生はにこっとした。

(5)「もっとあがいてみたら? ってこと。」

エントリーはちゃんとしておくから、と麻里子先生はスタジオをあとにした。

あがく。あがくってなにを、どうやって……。

日曜日の朝、いつもの通り五時半に起きてランニングに出た。商店街をぬけて、落合川まで行き、川沿いの土手を走る。日中は真夏並みの暑さだけど、この時間はまだ風が気持ちいい。土手を走っていると、犬の散歩をしている人やランニングをしている人とすれちがう。だいたいいつも同じ顔ぶれだ。少し前まで、ここにはもうひとり……。

ん? この足音って。

スピードをゆるめてふりかえると、「あっ」と無意識に声が出た。

ばたばたと足音を立てて細川糸子(いとこ)が走ってくる。

「町田さーん!」

細川さんは両手をあげて左右に交差させている。

「あー、追いついた。」

わたしの前まで来ると、膝に手をついてぜいぜい息を荒くしている。地面に汗が数滴落ちた。

「思いっきり息あがってるけど。」

細川さんはうんうんと頭を上下にふって、顔をあげた。顔も真っ赤だ。
「久しぶりだからしょーがないよ。」
「少しずつならせばいいのに。って、もう運動していいの？」
細川さんは虫垂炎(注2)の手術をして、それからずっと体育は見学をしている。運動会も見学で、さすがにかわいそうだと思ったけれど、「応援団ならできる！」とかいって、滝島たちと盛り上がっていた。
転んでもただじゃ起きないって、こういう子のことをいうんだろうと、妙に納得したのを覚えている。
「もうばっちり！」といったあと、細川さんはにやっとした。
「やっぱり町田さん、あたしのこと心配してくれてたんじゃん。」
「してないっていったでしょ。」
「またまた～。」と、さらににやついている。
細川さんの、この自己肯定感の高さはどこから来ているんだろう。
とん、と地面を蹴って走り出した。
「あ、待って。」
細川さんがとなりに並んだ。(6)ちらと横目で様子を確認して、ペースを落とした。

（いとうみく『ちいさな宇宙の扉のまえで』童心社　による）

（注1）ストイック＝目標のために厳しく自分を律すること。　（注2）虫垂炎＝大腸の一部「虫垂」に生じる炎症。

問1　本文中の、(a)険のある、(b)辛気臭くなって、の意味として最も適当なものを、それぞれ次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

(a)　**ア**　悪意を込めた　　**イ**　きつい印象の　　**ウ**　大げさな感じの　　**エ**　本心を隠した

(b)　**ア**　雰囲気が重苦しくなって　　**イ**　ぎすぎすしてけんかになって　　**ウ**　二人だけの世界に閉じこもって　　**エ**　顔つきや言動が反抗的になって

問2　本文中に、(1)猛獣がいて猛獣使いがいなかったら大変じゃん。とあるが、細川さんのこの言葉はどういう意味か。その説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　良子が修学旅行に行かないと、旅行中に自分の相手をしてくれる人がいなくて張り合いがないということ。
イ　良子が修学旅行に行かないと、旅行中に良子の友人たちの間できっと雰囲気が悪くなるだろうということ。
ウ　良子が修学旅行に行かないと、旅行中にクラスの皆が係の仕事を押し付け合いトラブルが起こるということ。
エ　良子が修学旅行に行かないと、旅行中に一緒に食べる約束をしていたお菓子を食べられなくなるということ。

問3　本文中に、(2)大切なものが増えたぶん、わたしは弱くなった。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　友だちや母と一緒にいたいという気持ちが大きくなり、様々な活動に参加する機会も増えて、バレエのことだけを考えていた時よりも集中力が落ちたということ。
イ　友だちや母とのかかわりの中でトラブルが多くなり、気を遣うことも出てきて、バレエのことだけを考えていた時よりも辛いと思うことが増えたということ。
ウ　友だちや母への不満が心の中にたまり、気持ちを切り替えられないことが増えて、バレエのことだけを考えていた時よりも精神的に不安定になったということ。
エ　友だちや母への思いが前よりも少し大きくなり、やってみたいと思うことも出てきて、バレエのことだけを考えていた時よりも迷うことが多くなったということ。

問4　本文中に、(3)でも。とあるが、良子がこの先を言わなかったのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア　レッスンのときはいつもバレエ以外のことを口に出すことを固く禁じられているので、ここで修学旅行に行くかどうか迷っているなどと余計なことを言って、先生に叱られることを恐れていたから。
イ　麻里子先生の言うことに今回だけは従うことはできないと感じているが、先生の言葉には理解できない部分もあり、反論したくてもどう言えばよいかわからず、説得する自信が持てなかったから。
ウ　麻里子先生の言うようなやり方ではバレエだけに打ち込んできた自分が揺らいでしまうと思ったが、先生の言う通り自分が迷っていることにも気づいていて、きっぱりとは否定できなかったから。
エ　口下手な自分を長く指導している麻里子先生を信頼しているので、自分のバレエに対する強い気持ちと今抱えている複雑な思いをわざわざ口に出さなくても、先生ならわかってくれると思ったから。

問5　本文中に、(4)すっと真顔にもどった。とあるが、ここでの麻里子先生の様子の説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　それまでは良子にわかりやすいように明るく冗談めかして話をしていたが、自分の思いをここでしっかり伝えたいと、改めて良子に向き合おうとしている様子。

イ　それまでは良子を緊張させないようにくだけた口調で話をしていたが、教室の方針についてここで正しく説明したいと、改めて良子に視線を向ける様子。

ウ　それまでは良子に伝わりやすいよう簡単な言葉だけで話をしていたが、レッスンの意図をここで正確に理解してほしいと、改めて良子に届ける言葉を選ぶ様子。

エ　それまでは良子を傷つけないよう少し遠回しに話をしていたが、自分の期待にここでしっかり応えてほしいと、改めて良子にまじめな言葉をかける様子。

問6　本文中に、(5)もっとあがいてみたら？　ってこと。とあるが、麻里子先生がどんな意味で「あがく」という言葉を使っているかについて生徒たちが話し合っている。本文の内容と会話の流れをふまえ、会話文の［　I　］に当てはまるものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

生徒1　「あがく」って言うと、苦しい感じがするけど、麻里子先生は「にこっと」このセリフを言っているね。「あがく」ことは良子に必要なことだと思っているようだね。

生徒2　でも、良子は混乱しているよ。麻里子先生は「エントリーはちゃんとしておくから」って言っているけど、オーディションに出たら修学旅行には行けないわけでしょう？

生徒3　良子は不器用な子なんだね。麻里子先生の考えもわからないし、自分の気持ちもうまく麻里子先生に伝えられないみたいだね。

生徒1　真面目なんじゃないかな。「ほかのことは望んじゃいけない」って決めつけて、今までバレエのことしか考えていなかったようだね。

生徒2　そういえば、麻里子先生はこのセリフの前に「野球ばか」の話をして、「良子ちゃんには、そうなってもらいたくないな。」と言っているよ。それがなにか「あがく」と関係しているんじゃないかな？

生徒3　なるほど、麻里子先生が伝えたいのはきっと、［　I　］ってことだね。

ア　チャンスを逃してもその悔しさが強い気持ちにつながるはずだから、あえてバレエから一度離れてみればいい

イ　普段と違う経験は表現力の向上につながるはずだから、なんとかして修学旅行に行ける方法を考えてみればいい

ウ　修学旅行は途中からでも参加できるのだから、欲張ってオーディションと修学旅行の両方に参加してみればいい

エ　すぐにはどちらかを選べないほど大切なものがたくさんあるのはいいことだから、とことん悩んでみればいい

問7　本文中に、(6)ちらと横目で様子を確認して、ペースを落とした。とあるが、この一文の説明として最も適当なものを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選べ。

ア　あきれつつも細川さんのペースに合わせる良子の様子を描写することで、良子が友人を気にかけていることを示している。

イ　さりげなく細川さんの状態を確認する良子の様子を描写することで、細川さんが手術後で本調子でないことを示している。

ウ　細川さんの位置を確認して速度を調整する良子の様子を描写することで、細川さんと距離を置きたい良子の気持ちを示している。

エ　明らかに細川さんよりペースが速い良子の様子を描写することで、良子が自分の運動神経の良さを誇っていることを示している。